

「写真集・小さな引揚者」、映画「嗚呼 満蒙開拓団」等

宮下 春男

＜敗戦翌年、奉天収容所の写真＞

写真集「小さな引揚者 飯山達雄=絵と文」（1985年8月、草土文化刊）を見た。飯山達雄氏は敗戦後に葫蘆（ころ）島から引揚者を乗せる船で逆に「満洲」へ渡航され、瀋陽市に入り敗戦後の「満洲地区」（以下、「」省略）での避難民を写した、多分唯一の方であろう。資料によれば氏は「在外邦人引揚げの記録—この祖国への切なる慕情」昭和45年、毎日新聞、「敗戦・引揚げの慟哭 {写真集—はるかなる大陸<第三集>}」飯山達雄、昭和54年、国書刊行会及びこの小さな引揚げ者という三部作を発表されているという。

写真集「小さな引揚者」、全103ページのこの本には飯山達雄氏が撮った奉天（現瀋陽）市内での孤児収容所の児童達の写真が10枚含まれている。他は葫蘆島での乗船風景、船内、日本到着後の写真等である。たった10枚であるが、敗戦翌年昭和21年7月瀋陽市の在満日本人収容所の状況を写した誠に貴重な写真である。写っているのはやせ衰えた児童達、うつろな眼、空っぽの茶碗、かび臭いと表現された畳に横たわる児童達、年寄と見紛うほどに皺のよった児童の腕……。その写真には次の文章が添えられている

「奉天の元加茂町といわれた地区にある本願寺が、日本人の孤児収容所となっていた。そこは、まさしく生けるしかばねの餓鬼地獄だった。19人の日本人孤児が、栄養失調の体を、カビくさい畳の上に横たえていた。ほとんどの子が北満から2ヶ月も3ヶ月もかかって逃げてきたのだという。肉親は、逃亡のとちゅうで略奪や暴行にあって殺されたり、行方不明になったり、栄養失調で亡くなったりして、ひとり残されてしまったのだ。孤児達の世話は、やはり北満から逃げてきた二人の女性がみていた。

次のページにはさらに続けて

「ここでも食糧はそこをついており、一日にたった一碗のコーリャンがゆがせいぜいだという。ほんの少しのカンパンやゆでたじゃがいもがおやつに配られる日も、数えるほどしかない。子どもたちはやせるだけやせ細り、歩くこともままならなかった。引揚船がこなければ消えてゆく運命を待つばかりだった。7月15日の朝、孤児たちにも引きあげの指示がきた。奉天駅から屋根のない貨車に乗せられ、午後2時出発。とちゅう、後ろに連結されていた客車が襲われたが、貨車にまで及ばずに助かった。」

初めてこの写真を見て、66年前を思い、胸が潰れる思いだ。この写真集があることを私が知ったのは坂本竜彦氏の「満州難民 祖国はありや」（1995年4月刊、岩波書店）で紹介されていたので、急ぎ図書館から借り出して繰返し眺めている。たった10枚、でもとても貴重だ。と心の中で繰り返す。写真を撮った気候は幸いなことに満洲の7月である。春になれば草木が芽を出し、農作物の栽培が出来るのだ。暖かくなれば、植物の成長は日本ではよりは数倍の速さで成長する。飢えを防ぐことが出来る。凍える事もない。やせ衰えて

いても酷寒の冬を生き延びた子供達だ。冬だったらどのような光景だったろうか。孤児達が横たわっていても夏でよかった。

読みすすむうちに、飯山氏が帰国されてから写真 50 点をプリントされて在外同胞援護会へ 3 部提出されたとある。援護会から外務省やGHQへ提出されたのだろうか。その中に写真集収録以外の写真も含まれているのだろう。勿論葫蘆島も中国領土であり、乗船するまでの姿は正しく収容所での生活そのものなのだ。しかし私としては内陸での状況を撮った写真をもっと見たいという願望が抜けない。

一体、どうしてこのような写真を持ち帰ることができ、日本で印刷することができたのだろうか。昭和 21 年の引揚時には文章・写真等は全て没収された筈で、日本へ持ち込める訳がないのだ。この写真と文を書かれた飯山達雄氏はどんな方法で撮ったのだろうか。という疑問に対し本人は大意次のようにのべておられる。“戦争が終わった時、軍人や軍に属していた人々はいち早く帰国したが、多くの日本人は翌年になっても大陸に残され、オンボロ船が博多―大連間を 10 日もかかってしかも 1 回にわずか 5 千人しか運べない。これでは 1 年かかっても 18 万人しか運べない。百万を超える人々を運ぶのに 10 年も掛かってしまう。ところがGHQは一般人はGHQの仕事ではないと断られ”「そこで日本政府が腰抜けなら私がもう一度中国大陸に渡って、残されている日本人の実際の様子を写真に写してGHQに突きつけようと決意したのです」と書いている。

決心した飯山氏は在外同胞引揚援護会の友人の紹介で 7 月上旬（昭和 21 年）に満洲・葫蘆島へ向かう引揚船に便乗することができた。戦後、物資の乏しい時、カメラやフィルムが簡単に手に入らない、銀座や新宿の焼け跡の露天市で買い集めた。

「カメラとフィルムは現地の監視員の目をごまかすために軍の衛生兵が使ったカバンを露天市で手に入れ、大きく赤十字のマークを描き、カバンの底にカメラとフィルムを隠させ、上のほうにはガーゼ、ピンセット、ヨードチンキや薬品ビンなどを並べて、だぶだぶの白衣の上から担ぐと衛生兵と見分けが付かないほどでした」。こうして飯山氏は「昭和 21 年 7 月 5 日夜半、博多港を出港し、4 日目の朝コロ島棧橋に接岸した。コロ島の駅構内へ貨物倉庫を通り抜けて出ると、ホームでは錦州行の貨物列車が発車するところだったので、車掌にお金をつかませて乗り込んだ。錦州からはさらに奉天行きの旅客列車に乗換え、翌朝早く奉天に着いた」。飯山氏は朝鮮で生活され敗戦で引揚げた方であり土地勘があったとはいえ、氏の果敢な行動力がこのような貴重なフィルムを得ることが出来たのだ。

奉天駅で聞いた日本人死体の処理場所、イナバ町の「大豆畑を通り抜けると土砂の盛り上がったところの後方に大きな穴が見えてきました。近づくと異臭が鼻をつき、もり土の上に駆け上がってのぞいたとたん、その凄惨な光景にギョッとして息を呑みました。直径 5、60 メートルもある穴に腐乱した死体がるいとおり重なり、白骨になっているものもかなりあります。私は雨の中に佇んだまま、その穴に向かって手を合わせました。翌朝、孤児を収容している本願寺を訪れました」。そのときに写したのが 10 枚の孤児達の姿であ

った。博多港に帰り着いた氏はさっそく「引揚者の実態を撮影した写真をプリントし、50点ずつ3部つくって在外同胞援護会に提出した。その写真は外務省とGHQに渡されたと思います。それが効をそうしたのかどうかわかりませんが、その後大陸在留邦人、百何十万人の引揚は急ピッチですすみ、2年ほどの間に終わりを告げました」。と書いた飯山達雄氏は1985年7月に、撮影してから39年目にこの写真集を出版された。従って説明文も39年を経た後の文章である。

戦争中、直接米軍と対峙した場所・地域は米軍が写真記録を残しているもので、いずれも鮮烈な映像が記憶と重なり、何時までも忘れられない歴史記録となっている。一方、中国大陸、特に満洲では在留日本人全てが、明日の命がどうなるかでそれこそ手一杯であり、歴史の証言としての映像を記録する余裕はなかったろうし、写したとしてもフィルム等は引揚時には全て没収された筈だ。ソ連軍は日露戦争の仕返しとばかり略奪に明け暮れ、写真映像記録は撮らなかった。加えて偽国家と呼ばれた国が崩壊した中での原住民はそれまでの制度や仕組みを破壊することが当然であり、国民党と共産党の軋轢のなかで在留邦人は右往左往するばかりであった。まして開拓団員は着の身着のまま、でなく身包み剥がされ麻袋を着て、辺境から飢えと疲れと長途の逃避行で都市部に辿り着くのが精一杯だった。あの悲惨な状況を写した映像のないことが、人々をしてあの時の苦しみを次世代に伝える映像が少ないことが、歴史からも忘却の彼方へと向かわせているのではないかと思う。今日、「満洲」を写し出す写真や映像は戦前のものばかりだ。

氏の現地へ行って写真を写す決意の動機はなんだっただろう。本の裏表紙に記されている氏の略歴に拠れば、氏は朝鮮に渡り、鉄道局に入り、朝鮮、中国大陸の山々を踏破する登山家であったらしい。敗戦で先に引揚げた筈の家族の行方がわからず、探しあぐね、また中国からの引揚が遅々として進まない事に気をもみ、持ち前の行動力で氏は現地事情を確かめるため渡満されたのだ。氏の大胆な行動、緻密な準備と細心の注意でそして貴重な写真が、私にとっては歴史遺産とも云うべき資料が残されたのだ。感謝、感謝である。

<敗戦後の引揚げ関連>

満洲からの引揚に関しては、厚生省が纏めた「援護五十年史」(平成9年3月刊)によれば、軍人軍属復員の根拠はポツダム宣言の「日本国軍隊は、完全に武装解除せられたる後、各自の家庭に復帰し……」が根拠であるが、一般邦人の引揚については、日本への引揚を規定する根拠はなかったという。

そもそも敗戦時海外にあった一般邦人については、外務省は在外公館宛昭和20(1945)年8月14日に<三か国(ポツダム)宣言受諾に関する訓電>により「居留民は出来る限り現地に定着させる」方針を執るとともに、現地での居留民の生命、財産の保護について万全の措置を講ずるよう施策を指示した。その後、8月30日には<外地(樺太を含む)及び外国在留邦人引揚者応急援護措置要綱>(次官会議決定)を、9月7日には<外征部隊及び居留民帰還輸送等に関する実施要領>(閣議了解)を定め、これによって海外在留一般邦人の保護及び引揚げてくる者の受入援護等に関する基本的事項が明示された。

朝日新聞に拠ればこの時期、8月23日には外務省がマニラの連合軍総司令部に送った電文は「満洲蒙疆北鮮では日本軍及邦人に対する無法なる発砲略奪暴行強姦など目に余る行為発生、逐次治安維持不可能となり……」とあり、外務省は満洲での状況を把握していたと考えられると報じている。

さらに9月24日の次官会議では前述の〈三か国宣言受諾訓電〉に沿った海外居留民の現地定着及び帰還者援護等について〈海外部隊並びに海外邦人帰還に関する件〉（次官会議決定）を決定した。それは「海外邦人に関しては、極力これを海外に残留せしむるため、その生命財産の安全を保障するとして居住地における生活の安全を期することとし、帰還すべきものに対しては速やかに配船その他帰還に必要な措置を講じ……」と一般邦人の現地残留を指示していた。

しかし、10月25日に至りGHQより、日本政府の外交機能が全面的に停止されたことから、海外在留の一般邦人は、各地域の連合軍及び当該国官憲の強制収用命令または終戦に伴う現地の混乱による生活手段の喪失など残留することが危険な状態となったため、日本に引揚げざるを得ないこととなった。

GHQは海外から引揚げてくる邦人の受入の為の日本側が取るべき措置、具体的方法を日本政府に指示してきた。昭和21(1946)年3月16日にはこれまでの指令を取りまとめた覚書を〈引き上げに関する基本指令〉として、その後5月7日にはこれを全般的に改定した〈引揚げに関する覚書〉を発し、邦人の引揚げ及び在日外国人の送還につきGHQの基本の方針を示した。としている。

これらについて平成12(2000)年12月20日付け朝日新聞は、敗戦当時日本政府は「居留民は出来得る限り定着の方針」が昭和20年8月14日に外務省が各地に送った緊急電だったと公開された我国外交文書の要旨を報道している。

〈敗戦後満洲の状況認識〉

昭和20年当時、満洲に居留していた一般邦人は開拓団を含め約155万人で、同年6月以降壮年男子の多くはいわゆる“根こそぎ動員”により、逐次関東軍に召集されていた。開拓団は満洲の全省に入植しており、総人員は約27万人、このうち壮年男子約5万人が軍に召集され、日ソ開戦時には老幼婦女子を主体とする約22万人が現地に居留していた。8月9日、ソ連軍の不意の攻撃を受けた北満辺境地域居住の邦人・開拓団員は混乱のうちに避難を開始し、多くは徒歩で長途に亘る退避行動をとられた。開拓団現地残留者も含め、ソ連軍の侵攻と満軍、土匪の反乱、現地住民による略奪・暴行や飢餓疾病等により多くの犠牲を出し、さらには進退窮まり集団自決を行う等、多くの悲惨な事件も発生した。

戦争による混乱も昭和20年10月頃にはようやく収まったが、ソ連軍に捕虜とされた一家の主・徴兵軍人はシベリヤに抑留され、残された開拓団の留守家族や北満の辺境にいた邦人はようやく収容所に辿り着き収容された。

満洲の中部、南部の都市においては北部満洲から多数の邦人が難民となって流入してきた。これらの邦人は、窓や床板を剥がされ荒れ果てた学校、寺院、病院等の公共の建物倉庫、旅館等に収容された。この人々に対し、各地に邦人が結成した難民救済委員会等が食

糧、衣服、住居、衣料、死亡者の処理等の援護を行ったが、既住邦人を上回る避難民の流入は収容住居の狭さと不良、酷寒に向かって食糧、衣服、燃料等の不足のため栄養失調となり、また、生活環境がよくないため発疹チフス等が流行し多数の死亡者を出した。旧関東州（大連市）は、終戦後治安は一時乱れたが次第に平静を取り戻し、一般邦人の経済活動はある程度許され、満州に比較すれば安定した生活をしてきた（援護五十年史、等）。

<満洲からの引揚げ実施>

「満洲」は指令第 1 号によりソ連軍の管理地域となったが、ソ連軍は在満邦人の本国送還についてはなんらの措置もしないまま昭和 21 年 4 月に撤退して行った。この後を引き継いだ中国東北保安司令官と米軍代表との間に在満日本人の本国送還に関する協定が、昭和 21 年 5 月 11 日に成立した。日本側は日僑善後連絡総処（以下、連絡総処）を瀋陽に設置し日本人送還について計画し、ようやく引揚げが開始されることとなった。昭和 21 年 4 月 23 日に引揚げ準備命令が発せられ、錦西、葫蘆島地区約 2,400 人の同胞が 5 月 7 日、葫蘆島においてリバティー型輸送船 58 号に乗船し 5 月 17 日佐世保に入港した。この引揚げ船に続き、同島から佐世保、博多、舞鶴の各地に続々と同胞の引揚げが行われた。連絡総処は引揚げ順序に 1,500 人をもって 1 個大隊を編成し、1 列車で概ね 2 個大隊を 1 列車 30 輛内外編成の無蓋・有蓋貨車で輸送した。また、瀋陽市内、乗船地の葫蘆島に約 4,000 人、錦西地区に約 2 万人を収容する収容所を開設した。

中国共産党地区からの引揚げは、昭和 21 年 8 月、米軍と共産党軍との間に日本人送還協定が成立し、同年 8 月に約 3,000 人、9 月に約 18 万 3,000 人、同 10 月には約 5 万 1,000 人の日本人が国民政府と共産党軍の数箇所の境界地点において引渡され、その後は連絡総処の統括の下に引揚げが実現した。こうして昭和 21 年 5 月に開始された引揚げは、同年 10 月 30 日出発の引揚げ船を持って一先ず終了し、この引揚げに於いて国府軍地区から約 77 万 3,000 人、共産党軍地区から約 23 万 7,000 人計約 101 万人が引揚げた。この引揚げを「第 1 期百万人引揚げ」と五十年史は呼んでいる。

第 2 期引揚げは 11 月下旬から 12 月下旬までに共産党軍治下の安東、熊岳城等からの約 4,300 人が葫蘆島から博多または佐世保に引揚げた。第 3 期引揚げはその後共産党軍治下の通化、安東方面から奉天に流入する邦人が相次ぎ、また通化には数百人が難民化しているとの情報から約 300 人を奉天に誘導し、さらに国府軍地区残留の者合計 1 万 8,000 人が昭和 22 年 6 月下旬から同 8 月上旬までに延べ 9 隻の引揚げ船により葫蘆島から佐世保に引揚げた。その後新京で国府軍に留用されていた邦人約 6,500 人は昭和 22 年 8 月 9 日から 9 月 29 日までの間に、国府軍援護の下、新京から奉天に脱出してきた。これに奉天で帰国を待っていた者の合計 1 万 1,000 人が葫蘆島から 6 隻の引揚げ船により、9 月下旬から 10 月下旬までに佐世保に引揚げた。第 4 期引揚げ、国共内戦が激しくなり新京からの陸路移動は困難となり、そこで国府軍が軍需物資を輸送している大型輸送機の帰路を利用し、昭和 23 年 6 月 4 日から 7 日までの 4 日間に延べ 49 機により 2,449 人が、第 2 陣は同年 8 月 7～9 日の 3 日間に延べ 19 機により 871 人が奉天から錦州に空輸され、錦州地区に残留していた者を加え、葫蘆島から引揚げ船で佐世保に引揚げた。

旧関東州からの引揚げは概ね平穏に実施され、米ソ協定に基づき昭和 21 年 12 月から昭和 24 年 10 月までの間に 22 万 5954 人が引揚げた（以上、援護五十年史、同歩み三十年）。

これ以後集団引揚げは中断していたが両国の赤十字社協議による昭和 28 年からの集団帰国は 3 月の第 1 次から 10 月の第 7 次までに 26,127 人が帰国した。出港先別では秦皇島 7,567 人、天津 10,588 人、上海 7,972 人であった。秦皇島及び天津は満洲地区からの人々が主であった。そしてこれらの引揚げ、日本の土に上陸の情景は残されている。

<映画 「嗚呼 満蒙開拓団」>

小さな引揚者という写真集のお蔭で、極く一部ではあるが戦後満洲での生活状況の一端及び引揚げの状況を知る事が出来た。しかし、対米軍関係は日米双方の映像が数多く公開されていることに比べ、ソ連軍が侵攻した満洲地区の敗戦後の映像の少なさは異常事態であったとは云え、やはり映像の少なさは異常だ。あの引揚げ時には検査が厳しく持ち帰ることは困難だったと聞くが敗戦後満洲での生活を写した写真を、何方か 1 枚、或いは誰かが持ち帰ったという話を聞いて居られないだろうか。1 枚ずつでも集成すれば立派な記録となる。敗戦時のあの満洲の悲惨な状況を写した写真や映像を、歴史の記憶として纏められないものかと思う気持ちが強くなっていた。

このようなもやもやとした気分でした時、2009 年 5 月の「方正友好交流の会」第 5 回総会への参加を誘われ出席した。その時羽田澄子氏の監督された「嗚呼 満蒙開拓団」の映画が完成している、6 月 13 日から岩波ホールで上映されると聞き、総会会場で入場券を購入し、そして見た。敗戦直後の状況ではないが、かつての開拓団跡地で残っていた当時の家屋や特に元開拓団員や元団員の子弟、元残留孤児である複数の方々の種々経験された証言は生々しく、敗戦後各地からの避難・被收容居住生活等の状況は戦後 65 年を経ても当時を髣髴とさせるもので言葉を映像にさせていただいた。さらに岩波ホールのみであったのだろうが 7 月には週代わりで映画に出演された方々が上映後にホール壇上で羽田監督のインタビューに応じて当時の状況を語られた。また戦後、中国政府が建立してくれた「方正地区日本人公墓」が紹介されていた。古くて新しい、得がたい記録である。私には昭和 28 年まで生活した中国農村の当時を想起し、感慨深いものだった。しかし語られはしても避難状況や收容所生活の当時の情景はどうやって表現できるだろうか。

羽田監督は中国大連生まれと紹介されていたが、正に開拓団員を代弁していただいているような胸に迫るものがあった。この映画は各地で上映され、大きな反響を起こしたと聞く。満洲開拓団という存在が忘れ去られようとしている今、このような記録映画を作製していただいたことは歴史の記憶を新たにすることで時宜を得たものであり、もっと多くの人に見ていただきたい。個人としても今頃ではあるが、この貴重な記録を製作していただいた勇気にお礼を申し上げたい。また 2009 年度文化庁の文化記録映画大賞を受けられたという。おめでとうございます。

<演劇・声なき氷像>

2010年5月29日の方正友好交流の会総会の席で、配っていただいたのが「声なき氷像」上演の案内だった。満洲開拓団員の敗戦後の物語である。当日、劇団代表の飯牟礼一臣氏をご出席されていたのだ。あの敗戦時の凄惨な逃避行、収容所での悲惨な生活を、生の舞台上で表現している。演じておられるのは「あびこ舞台」という千葉県我孫子市のアマチュア劇団で、劇のあらすじは「シャオスピーン」という満洲開拓団員の重田巖が召集され、その後ソ連軍の侵攻によって妻の久江は5歳の娘満子と荒野の満洲を逃げ惑い、ようやく難民収容所に辿り着いたが、久江はソ連軍の慰安婦に徴用され、そのため青酸カリ自殺をする。現地で召集解除で収容所に辿り着いた巖も餓死寸前、せめてこの子ほど中国人に預ける。生き延びた巖は戦後引揚げた。満子も親切な日本人に助けられ満洲から引揚げることができ、そして福岡の孤児収容所に、さらに沖縄にまでの生々流転・・・。

親子が相間見えるのは、戦後60年を経てからで、敗戦後満洲の生活、親子離れ離れの波乱万丈が1時間40分に迫真の演技で凝縮されている。私は涙が止まらなかった。幸い客席が暗いので流れるままに観ていた。ああ、ここにもこのように歴史の記憶に意を尽くしていただいている方々がいる。アマチュアでは劇団の維持も大変と思うがよくぞ維持していただいている。活きている歴史資料だ。観劇しながら熱い震えがこみ上げて来た。

満洲開拓団は侵略の手先だった。だから仕返しを受けたのだと。だとしてもしかし恩讐を超えて「満洲」の敗戦当時の避難行・収容所等の映像や写真がもっとないものか。昭和の歴史資料として次の世代に引き継ぐために、それらを集め纏められないか。やはり欲しい。

<付記> 本誌前号、第11号(2010年12月15日発行)に掲載の文の題名が「無神経な『拓魂』碑文と満洲開拓団」となっていますが、原稿での原題は『「拓魂」碑と4月第2日曜日と満洲開拓団』を編集者が改編されたものであり、著者の意図を反映したものではなく、強いて改題すれば『「拓魂」碑と4月第2日曜日』となるべきで、であれば著者の意図した満洲開拓関係に係る拓魂碑の存在と毎年4月第2日曜日が拓魂碑慰霊祭の日であることを啓蒙する主旨が理解されたかと思えます。日本全国に多くの拓魂碑が存在しますが、聖蹟桜ヶ丘の拓魂碑と170基を越す団碑の存在は全国レベルであることの啓蒙が第一義です。碑文に対して意見が無いわけではありませんが、そのためには碑文が書かれた背景、重大国策遂行の由来・意図等日満両国政府・関東軍の施策を詳細検討する必要があり、それには紙幅がたりず、従って前回掲載の文の内容に対してのタイトルとして碑文をのみ「無神経」と付けるのは少々無理かと思えます。著者の意図をご理解いただきたく付記しました。

(みやした・はるお：1936年富山県生まれ、1943年満洲開拓団員の家族として渡満、1953年帰国、1994年通商産業省(当時)を退職、宝飾業界等を経て現在に至る。09年8月、方正友好交流の会主催の「歴史検証の旅」に参加。方正日本人公墓を参拝した)